

目 次

はじめに

第1章 ソシユールと時枝の対立点から何を学ぶか	1
1. ソシユールと時枝誠記	1
2. モジュール性の問題	8
3. 言語の主体	12
4. 二種の文構造と二種の入れ子型構造	14
5. 視点により異なる言語観と分析法	18
5.1. 言語は自然現象か人文社会現象か	18
5.2. 形式か意味か	20
5.3. 言語表現の分析に言説を含むか否か	26
第2章 言語分析いろいろ	35
1. 広範な意味領域と言語分析	35
2. 今日の言語状況と言語政策	39
3. 多様な言語理論	45
4. 科学とは?	53
5. 言語理論の課題：新しいパラダイムを求めて	57
第3章 言語とは何か	65
1. 言語の本質	65
1.1. 言語習得と認知と行動	65
1.2. 意味の三角形	67
1.3. 言語の特性	70
2. 言語とそれをを用いる人間との関係	72

3. 作家にとって言語とは何か	78
4. 原理とその運用	83
第4章 言語は何のためにあるのか	87
1. ことばの捉え方	87
2. 語・文・言説の意味：意味獲得と意味解釈	90
2.1. 語の場合：社会的知識のラングとして閉じられた体系の語義	90
2.2. 文・言説の場合：パロールとしての意味	95
2.3. 意味獲得と意味解釈の違い	98
3. ことばと実態と意味	104
3.1. ことばと思考との関係	104
3.2. ことばと文化との関係	109
4. おわりに	113
第5章 構造と機能	117
1. 構造とは何か、機能とは何か	117
2. 構造と機能の関係	121
3. 言語理論における比重の違い	123
4. 今後の方向	126
第6章 日本語と言語類型	137
1. 日本語は〈話し手の主観、イマ・ココ〉を軸とする言語か	137
2. 言語類型	143
3. 日本語の特徴	150
3.1. 主観性・主体性とは何か	150
3.2. 〈イマ・ココ〉の視点	162
4. 言語の方略	165
5. 分析対象と分析方法のあり方	168

第7章 言語表現とコンテキスト	175
1. 言語表現：文・発話・言説・テキスト	175
2. コンテキスト	179
2.1. コンテキストの分類	179
2.2. 言語的コンテキストと非言語的コンテキスト	182
2.3. テキストとコンテキスト：生得的な言語能力と生後の経験	185
3. 言説(の秩序)とコンテキスト	187
4. 今後の課題	193
第8章 情報の役割：その光と影	197
1. 情報と思考と知識	197
2. 情報の利用	200
2.1. 情報の「価値」	200
2.2. 情報の問題点	204
3. 知識の継承	208
3.1. 自然現象と人文社会現象	208
3.2. 自然科学と人文社会科学	215
4. 人文社会科学の課題	219
第9章 ことばが力を失ったあと	225
1. ことばの力	225
2. ことばが力を失うとき	226
2.1. ことばを空洞化させるもの	226
2.2. 空洞化のあと：一般的な状況とその特徴	229
2.3. 空洞化のあと：多様な領域にみられる実態	233
3. 多様な言説とその評価	239
3.1. 多様な言説	239
3.2. 芥川賞の選評	243
3.3. 橋下徹大阪市長の主張	246
4. 不透明な時代	252
5. ことばの再生に向けて	258
追記1：離合集散の中での政治言説（2012年下半期）	262
追記2：「ことば遊び」の政治言説（2013年上半期）	270

第10章 言語分析への提言	281
1. 閉塞状況にある言語分析	281
2. 分析対象と分析方法の拡大に向けて	283
3. 提言	288
引用文献	291
索引	297
初出一覧	301